

## 後沢中俣

一九八三年九月一八日

一〇時三〇分、遡行開始。出だしは暗い樹林帯の中である。こちらの沢には伐採の手が及んでいないのかと思つて登りはじめたのだが、すぐに明るい造林地となる。

二層の滝があつて、直登するが、

あとはまた平凡。左岸には林道も出てきた。三〇分程遡行して二俣となつた所まで行つて引き返す。

(記)

〔タイム〕 後沢橋(一〇:三〇)↓遡

行終了(一一:〇〇)

## 後沢右俣

一九八三年九月一八日

一一時二〇分、遡行開始。右俣にそつた樹林帯では檜の木の間伐が行なわれている。この沢も平凡。ただほかの後沢流域の沢とは違つて、ず

つと樹林帯の中であつた。三〇分で稲子部落と七ヶ宿を結ぶ県道に出て遡行を終える。(記)

〔タイム〕 出合(一一:二〇)↓遡行

終了(一一:五〇)

### 沢独り歩き

孤独な沢登り

楽しくもあり、哀しくもあり  
孤独に追い立てられるようにして歩く足、ペースは早い

自分、一人を確かめる為に沢へ入る。甘さは許されず頼る人とならない沢、技術の未熟は、危険と隣り合わせスリルとなる。

私は、このスリル感が堪らなく好きだ。

まして先のわからない沢が私を引き付ける

独りで入る沢、

そこには私の人生がある。

寂しい心がある。

ルートをとる。

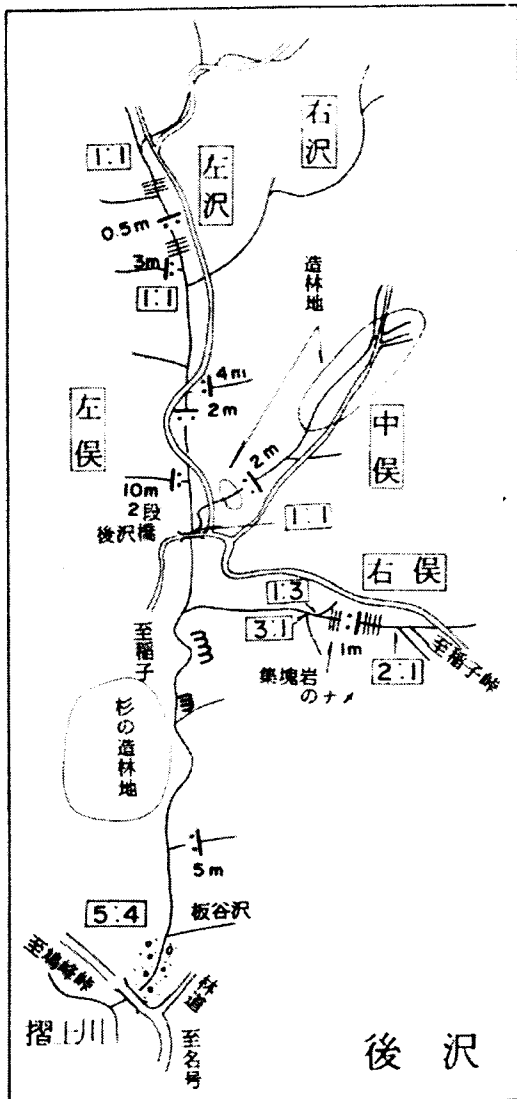
九時二〇分、沢は平凡なままでまた二つに分かれた。よっぽどこで帰ろうかと思ったのだが、やはり計画通り右沢の下降をやりうと思いい直して、遡行を続ける。

九時三〇分、沢ぞいの林道は終点となったが、造林地はまだ奥へと続いている。沢の方はというと、これはもう細々とした流れでしかな

い。これはもうここまでと、右手の斜面を登り、尾根を越えて右沢の下降に移る。

一〇時、右沢の下降開始。右沢は全く平凡で、滝一つかからないままに一五分で二俣まで下ってしまった。あとは林道に上がって、後沢橋をめざす。

帰途、またまたサルの群れに出会ってしまった。場所は今朝がたとほ



国道上で見かけたニホンザル

ぼ同じ所である。一一頭が視認できた。断定はできないが、朝方会ったのと同じ群れではないかと思う。トチの実やドングリを一生懸命食べていたようだ。(記・い・文)

「タイム」 後沢橋(八:三五) ↓ 右沢  
 出合(九:〇〇) ↓ 左沢終了(九:三〇) ↓ 右沢下降開始(一〇:〇〇)  
 ○ ↓ 下降終了(一〇:一五)